



G-CALL 050 G-CALL 050

Amber

琥珀の道

AGORA Special vol.237

Poland Road

中世の時代、バルト海沿岸で採れた琥珀を、国土を南北に
大きく蛇行しながら流れるヴィスワ川を利用して、
ポーランド王国の都クラクフの王族の元へ運んでいた道がある。
かつてハンザ同盟都市として栄えたグダンスクから
ワルシャワ、クラクフまで—
ポーランドの「琥珀の道」を辿る。

鈴木博美=文 Ryoichi Sato=撮影
Text by Hiromi Suzuki Photo by Ryoichi Sato

グダンスクの旧市街、マリアツカ通りには琥珀の露店が並び、意匠を凝らしたアクセサリーが売られている。それらはバルト海の荒波の中で採取され、職人たちにより丁寧に磨かれたものだ。太古の世界を秘めた琥珀。その輝きは神秘的だ。



29 AGORA January & February 2012



四〇〇〇万年の記憶

旧市街を歩いていると、ロイヤルロードや教会通りに並ぶ露店や土産物店、高級宝飾店で琥珀の煌めきが目に飛び込んでくる。

バルト海の琥珀は、約四〇〇〇万年前に豊かな森林地帯に繁茂していた樹木から滲み出た樹脂が、長い歳月をかけて硬化したものだ。古代から良質な琥珀を産出し、今日も世界一の产地として知られている。温もりを感じさせる灯火のような色をした琥珀は、古来装飾品として重宝され、盛んに交易が行われてきた。

モトワヴァ運河沿いにある工房を兼ねた琥珀ジュエリー店「ミシエル」を訪ねた。ここでは、職人自ら琥珀の採取を行い、研磨、デザ

イン、完成までの全ての工程を店単位で作業する。二階の工房では職人たちが琥珀を粗いものから次第に細かく、原石を丁寧に磨いている。そして磨きながら時折じつと琥珀の内部を見つめる。もし昆虫等が見つかったら、高値がつくからだ。

拡大レンズを通して塊を観察すると、琥珀が閉じ込めた数千万年前の世界を覗くことができる。琥珀はさながら太古の世界を秘める小宇宙、あるいはタイムカプセルのようだ。

磨き上げられた琥珀は、原石を持つ美を最大限生かすようにデザインされる。

「完成の段階で、原石の半分は粉

になってしまいます。この粉は、スパイスなどと調合して、教会の儀式で使うお香に利用されます」と語るのはオーナーのレフ・パジェク氏だ。琥珀はボーランド語でブルシュティンといい、「燃える石」という意味を持つ。琥珀は燃える。

「琥珀は幸運の御守りです。ひとつさし上げましょ」

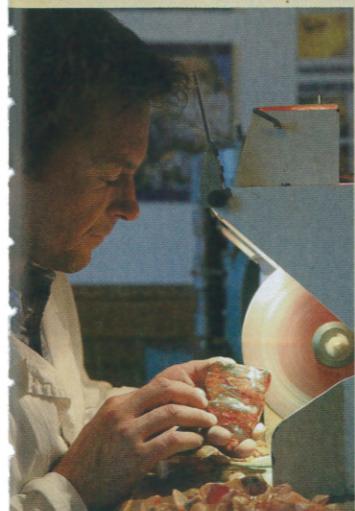
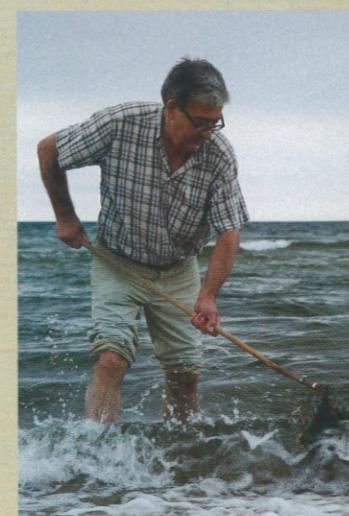
磨き終えたばかりの琥珀の塊を、パジェク氏が手渡してくれる。手に取つてみると拍子抜けするほどに軽い。

「琥珀は昔から病気や災厄から身を守り、富と幸運を呼ぶ御守りとして大切にされてきました。身につけることで邪氣を払い、精神を

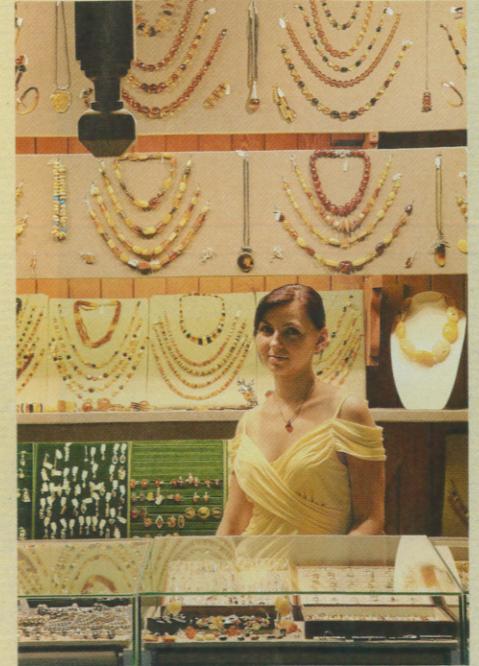
落ち着かせてくれるともいわれています。喉の痛み、風邪や神経痛などに効くとして、琥珀入りのクリームやエッセンスが今でも薬局で売られていますよ」

幸運の御守りと聞いて、手の中にある琥珀が急に愛おしく感じられた。

街の中心の広場に、グダンスクの守護神と伝えられているネプチューンの噴水がある。ネプチューには琥珀にまつわる神話がある。海の神ネプチューンの娘が、若い獵師と恋に落ちた。二人の仲を怒ったネプチューンは、若者を海に沈めてしまつた。それを嘆いた娘の涙が、海に落ちていつしか琥珀になつたという。



「琥珀の道」を行く



グダンスク(右上)から、ワルシャワ(左下)を経て、クラクフのヴァヴェル城(左中)まで、琥珀が運ばれていった。クラクフの「織物会館」にある琥珀店に並ぶ、さまざまなアクセサリー(左上)。



グダンスクの南東、マルボルクに残る13世紀のドイツ騎士団の城・マルボルク城。ユネスコ世界遺産に登録され、城内の博物館には当時の貴重な琥珀の装飾品も展示されている。



琥珀は「北方の金」とも呼ばれ、交易品として金と同重量で交換されてきた。古代のフェニキア・ギリシャ・ローマの商人たちは地中海諸国やエジプトに琥珀を運び、バルト海沿岸地方には金品などを運ぶことで発達した琥珀の交易路「アンバーロード(琥珀の道)」があつた。

一方、ポーランド国内にも、一四一六年にかけて繁栄したヤギエウオ王朝の時代、国土を南北に大きく蛇行しながら流れるヴィスワ川を利用した「アンバーロード」が存在した。バルト海で採取された琥珀はグダンスクから、ドツィ騎士団の築城で街の歴史が始

まり、コペルニクスの生地でもあるトルンを通り、現在の首都ワルシヤワへと南下して、当時の都クラクフのヴァヴェル城の王族の元へと献上されていた。

さらに川沿いの街をむすぶアンバーロードは琥珀の貿易で大いに繁栄した。琥珀は交易品としてポーランドに莫大な富をもたらしたのである。同時にアンバーロードは、現在のポーランド国内の主要都市の幾つかの基礎を築いたといつても過言ではないだろう。

クラクフの旧市街の中心には、「織物会館」と呼ばれる当時の交易所がある。今では琥珀のアクセサリーなどの土産物市場となっているが、いつの時代でも人を引き付ける魅力のある場所だ。路地を走り抜ける馬車の音、聖マリア教会から響くラッパの音も、中世

から鳴り続ける、変わらないこの街の生活音なのだろう。

数百年もの間ポーランドの都として栄えたクラクフを象徴する、ヴィスワ川にその勇姿を映すヴァヴェル城と街の全域は現在、世界文化遺産に登録されている。

中世以来の美しい街並を誇ったポーランドの首都ワルシャワも、第二次大戦中、市民によるナチスドイツへの抵抗運動の末、戦闘によるものではなく、ワルシャワ抹殺というヒトラーの意図で徹底的に破壊された。

戦後、生き残った人々は強い意志と尽力で街の再建に乗り出した。一八世紀の風景画や、街が破壊されることを予測していた教授たちによって書き残された建物のスケッチなどの記録を基に、「壁のひ



しつとりとした趣のワルシャワ旧市街広場(右)。ショパンが暮らしたワルシャワには、ショパンのイメージがちりばめられている。



ショパンの旋律

び一本」まで街を忠実に復元した
といふ。

現在のワルシャワに見られる旧
市街の美しい街並は、自國の文化
を残そうとする強い意志の象徴
と国民的アイデンティティーが形
となつた証である。

またワルシャワは「ピアノの詩
人」フレデリック・ショパンゆか
りの地としても知られている。今
も街には、家族で暮らした家やシ
ョパンが演奏会を開いたサロン、
好んで通つたカフェやレストラン

などが残されており、街を歩いて
いると、あちらこちらでショパン
の調べを耳にする。

中世の薫り漂う旧市街と、近代
的ビルが林立し洗練されたショッ
プが軒を並べる新市街を繋ぐ一キ
ロほどの大通りは、まるで時代を
自由に行き来できる時空の通路の
ようだ。

美しい音楽と激動の歴史が絡み
合うポーランド。近年、経済成長
も著しく、年々都心部の西欧化は
進む。しかし、中世の街並を愛し
忠実に復元した時のように、いつ
の時代も国民が琥珀を愛おしむ心
に変わりはない。

A

Information

日本よりJAL便にてフランクフルトへ。フランクフルトよりグダンスク、クラクフまでそれぞれ約1時間40分のフライト。ワルシャワへは、日本よりJAL便にてパリで乗り継ぎ、パリよりJAL・エールフランス航空コードシェア便にて約2時間15分のフライト。

取材協力=ポーランド政府観光局 www.poland.travel/ja



鈴木博美 Hiromi Suzuki

旅行ライター。旅を通して食や文化、風土を執筆。著書に、快適な女性の一人旅に役立つ電子書籍『OL一人旅レシピ』インド編、ベトナム・カンボジア編、エジプト編、『いつもの食材で作る世界の料理レシピ』など。

Ryoichi Sato

写真家。物語のある街を題材に旅行系の各媒体で活動中。旅先で出逢った「色」を大切に撮影、ジャンルは問わない。著書に『パラオ海中ガイドブック』(阪急コミュニケーションズ)などがある。